深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第79集

熊野遺跡V

2006

深谷市教育委員会

深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第79集

熊野遺跡Ⅴ

2006

深谷市教育委員会

序

埼玉県北部に位置する旧深谷市・旧岡部町・旧川本町・旧花園町の１市３町が合併し、平成18年1月1日をもって新たに深谷市が誕生しました。市域の南は比企丘陵と接し、北端は群馬県と接しています。この広大な市域の間を利根川・荒川という国内でも有数な大河川が貫流しています。

こうした豊かな自然環境のもと、古代人の暮らした足跡が埋蔵文化財として今なお多く眠っています。なかでも、縄文時代草創期の土器を出土した西谷遺跡をはじめとして、弥生土器で有名な上敷免遺跡、県指定史跡の鹿島古墳群、榛沢郡家正倉跡と想定される「中宿古代倉庫群跡」や国指定重要文化財「緑釉手付瓶」を検出した西浦北遺跡など、重要な遺跡が多数存在します。

今回報告する熊野遺跡は、ＪＲ高崎線岡部駅や国道17号線に近いことに加え、平成元年に開始された岡中央土地区画整理事業などにより各種開発が進み、これらに伴う発掘調査が多数実施されてきました。その結果、７間×３間をはじめとする大規模建物群や竪穴住居跡などとともに、道路状遺構・連房式鍛冶工房・石組井戸など特殊な遺構も検出されました。さらに、役人が使用したと考えられる帯金具や円面硯なども数多く出土しており、熊野遺跡は役所的機能を有していたことが想定されています。

本報告書は、アパート建設に先立ち平成11年に実施した熊野遺跡149次調査の成果をまとめたものです。住居跡や溝跡などが検出され、熊野遺跡の性格を考える上での資料を追加することができました。本書が学術・教育関係はもとより、文化財の保護・保存の啓蒙・普及を図る資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成まで、多大なるご理解とご協力を賜りました関係各位・諸機関に心より御礼申し上げます。

平成18年10月

深谷市教育委員会
教育長　猪野幸男

例　言

1．本書は、埼玉県深谷市岡に所在する熊野遺跡の、平成11年度に実施した149次発掘調査の成果をまとめたものである。

2．文化財保護法第57条の3第1項に基づく事業者あての指示通知は、次の通りである。
　　平成11年4月27日付　教文第3－43号

3．文化財保護法第57条第1項に基づく発掘調査の通知は、次の通りである。
　　平成11年4月27日付　教文第2－11号

4．発掘調査は、宮本直樹が担当し、平成11年4月26日～平成11年5月31日にかけて実施した。

5．出土品の整理及び実測・観察表の作成は、竹野谷俊夫が行なった。

6．図版作成は、宮本直樹と竹野谷俊夫が行った。

7．本書の執筆は、宮本直樹が行なった。

8．本書に掲載した資料は、深谷市教育委員会が保管している。

凡　例

1．発掘調査位置図は岡部町全図（1/10,000）及び岡部町平面図（1/2,500）を、遺跡分布図は国土地理院発行『本庄』（1/25,000）を使用した。

2．遺構実測図は、現場では基本的に1/20、カマド実測図を1/10とし、本書掲載の段階で1/60及び1/30とした。遺物については、基本的に1/3で掲載した。

3．図中の方位は、座標北を示す。

4．遺物観察表の数値に（　）のあるものは推定値、《　》のあるものは残存値を示す。

5．土層断面図及びエレベーション図のスクリーントーン（斜線）は、地山を示す。また、図中の数値は、標高値を示す。

6．遺構実測図中の英数字は、以下を表す。
　　SJ 竪穴住居跡　　SD 溝跡　　SK 土坑

目　次

序

例言・凡例

目次

Ⅰ　発掘調査の経緯及び経過 …… 1
　1．発掘調査の経緯 …… 1
　2．発掘調査・整理報告の経過 …… 1
　3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織 …… 2

Ⅱ　遺跡の地理・歴史的環境 …… 4
　1．地理的環境 …… 4
　2．歴史的環境 …… 4

Ⅲ　発見された遺構と遺物 …… 6
　1．熊野遺跡の概要 …… 6
　2．発見された遺構と遺物 …… 6

Ⅳ　まとめ …… 14

挿図目次

第１図　熊野遺跡の範囲 …… 3
第２図　熊野遺跡 149 次調査位置図 …… 3
第３図　周辺の遺跡分布 …… 5
第４図　熊野遺跡 149 次調査全測図 …… 7
第５図　１号住居跡実測図 …… 8
第６図　１号住居跡カマド実測図 …… 8
第７図　１号住居跡遺物出土状況図 …… 9
第８図　１号住居跡出土遺物実測図 (1) …… 9
第９図　１号住居跡出土遺物実測図 (2) …… 10
第10図　１号住居跡出土遺物実測図(3) …… 11
第11図　１号溝、２・３号溝実測図 …… 13
第12図　１～５号土坑実測図 …… 14
第13図　熊野遺跡（区画整理地内）
　遺構配置図 …… 15
第14図　熊野遺跡149次調査地点
　周辺遺構配置図 …… 16
写真図版１　149次調査検出遺構
　２　149次調査出土遺物

Ⅰ　発掘調査の経緯及び経過

１．発掘調査の経緯

埼玉県北部に位置する深谷市は、埋蔵文化財の宝庫として古くから知られてきた。なかでも、縄文時代草創期の土器を出土した西谷遺跡や、弥生土器で知られる上敷免遺跡、重要文化財に指定された緑釉手付瓶を出土した西浦北遺跡など、著名な遺跡が多い。

熊野遺跡は、深谷市の北西に位置する。ＪＲ高崎線岡部駅のすぐ北西にあたり、県道蛭川普済寺線と国道17号線に挟まれた範囲である。近年までは駅から少し離れると家も少なく、畑が多く残っていた。しかしながら、『岡中央土地区画整理事業』が平成元年に立ち上がり、事業が進展するに伴い景観が激変しつつある。

この区画整理事業に先立つ発掘調査は、平成４年度から始まり、調査件数は急増した。それ以前の熊野遺跡における調査は、岡部西小学校及び岡部西幼稚園建設に伴い４次の調査が実施されていたにすぎなかったが、平成４年度以降は現在までに162次に及ぶ発掘調査が実施されている。

調査の結果、竪穴住居跡700軒、掘立柱建物跡150棟を始めとして、石組井戸・道路状遺構・土橋状遺構を伴う大溝・連房式鍛冶工房など特殊な遺構も多数検出された。遺物では、多量の土器類のほかに、帯金具・円面硯・唐三彩・和同開珎・刻字紡錘車など一般の集落では見られない出土品が注目される。

今回報告する発掘調査は、アパート建設に先立ち、平成11年に実施したものである。

まず、平成10年９月14日に、黒澤清光氏（以下、「事業主」と記す）から、埋蔵文化財の所在についての照会が旧岡部町教育委員会（以下「町教委」と記す）にあった。町教委では、埋蔵文化財包蔵地図により開発予定地が熊野遺跡の範囲内であることを確認し、遺構の存在の有無を確認するための試掘調査が必要である旨を書き添えて、９月16日に事業主に書面にて回答した。年が明けた平成11年３月15日に、試掘調査依頼書が事業主から提出されたので、３月19日に試掘調査を実施した。敷地内において３棟が建設予定のため、長軸に沿って２本ずつ計６本のトレンチを設定した。調査の結果、竪穴住居跡や溝跡などを検出した。

なお、３棟の建物のうち南端の範囲においては、遺構・遺物ともに確認されなかった。

これを踏まえ、町教委と事業主で協議を重ねた結果、工事の変更は不可能であり遺跡の破壊は免れないため、記録保存のための発掘調査を旧岡部町遺跡調査会が実施することで調整を進めた。事業主もこれを了承し、平成11年４月12日付けで文化財保護法57条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が、町教委を経由して文化庁長官宛に提出された。

これを受けた遺跡調査会では、文化財保護法57条の１に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を所定の手続きを経て、平成11年４月19日に文化庁長官へ提出した。

埼玉県教育委員会教育長からの埋蔵文化財発掘届に対する事業主あての指示通知は、平成11年４月27日付け教文第３－43号においてなされた。

実際の発掘調査は、平成11年４月26日に開始し、同年５月31日まで実施した。

２．発掘調査・整理報告の経過

(1)　発掘調査の地番及び遺跡番号

熊野遺跡の埼玉県遺跡登録番号は、No.63－017である。

調査地点の地番は、深谷市岡字内出2844番地である。岡中央土地区画整理事業では、38街区11画地となる。

熊野遺跡では、先述のとおり過去に多数の調査が実施されてきた。深谷市が行なったものと㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施したものを合わせると、現在170地点に及ぶ。

今回報告分は、平成４年度以降実施した調査のうち149次調査と命名したものである。

(2)　表土除去

発掘調査は、４月26日から着手した。作業は、まずバックホーによる表土除去から始めた。

表土から30～50cm掘り下げると黄褐色ローム面が表れたので、これを遺構確認面とした。

表土除去は、建物２棟の範囲であり、全ての作業を終えるのに丸１日を要した。

(3)　遺構確認・基準点測量

表土除去に引き続き、翌27日には調査補助員による遺構確認作業を実施した。その結果、竪穴住居跡1軒、溝跡3条、ピット多数を確認した。

遺構確認状況の写真撮影の後、遺構の掘り下げを開始した。

なお、調査区は建物2棟の範囲であるため、便宜上北側の範囲をA区、南をB区とした。

(4)　遺構掘り下げ及び図化作業

遺構の掘り下げは、調査区北端の1号住居跡から始めた。まず、断面観察のためのベルトを設定し、これを残しながら掘り下げを進めた。また、遺物は極力原位置を保つように注意を払った。

基準点測量は株式会社東京航業研究所に委託し、4月28日に実施した。その後、住居床面を検出した段階で、埋没状況を調べるための断面観察を実施し、1/20の縮尺で図化した。

その後ベルトをはずし、遺物の出土状況の写真撮影を行い、1/20の縮尺で図化した。

遺物を取り上げた後、床面の精査を行い、柱穴・壁溝などを検出し、掘り下げを実施した。さらに、カマドの調査が終了したところで、完掘状況の写真撮影を実施し、別の遺構へ移動した。

他の溝跡やピットなども同様に調査を進めた。全ての遺構の掘り下げが終了した時点で、調査区全体の写真撮影を実施し、その後に全測図を作成した。

調査の全工程が終了し、機材・プレハブ等の撤収が完了したのは、平成11年5月31日のことであった。

(5)　整理・報告

発掘調査で検出された遺物の水洗・接合は、深谷市教育委員会が平成18年1月より開始した。これと並行して、図面の整理作業を行なった。遺物の実測は、平成18年3月から行い、併せて図版の作成を行なった。4月以降原稿を執筆し、たつみ印刷株式会社に入稿したのは18年8月のことであった。

報告書の印刷が完了したのは、9月27日のことである。

3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

(1)　発掘調査（平成11年度）

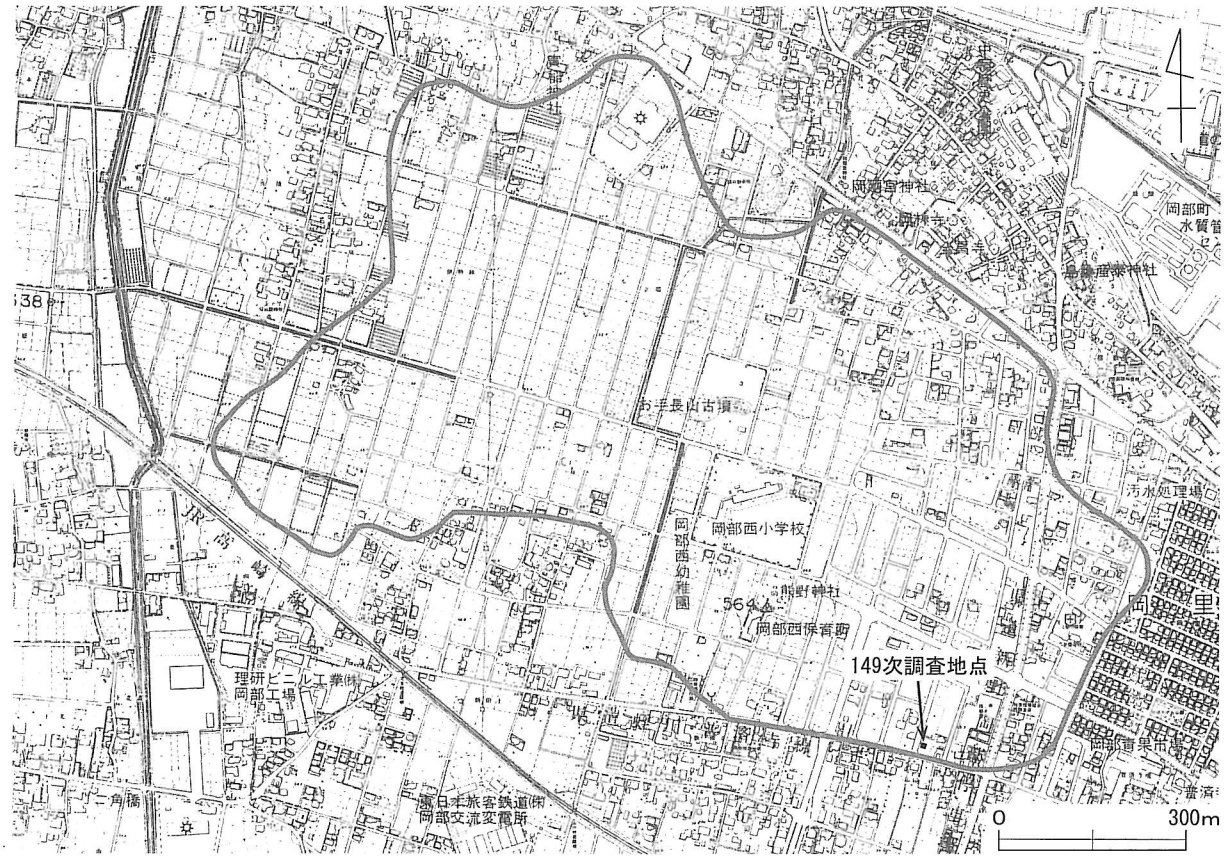
岡部町遺跡調査会会	長	大野福治
	理　事	曽田幸政
	理　事	小林初太郎
	理　事	久保田邦夫
	監　事	高橋好道
	監　事	戸塚　尚
	事務局長	鈴木秀雄
	事務局次長	鎌田恵一
	事務局	大谷住雄
	〃	新井芳夫
	〃	井田幸一
	〃	鳥羽政之
	〃	平田重之
	〃	宮本直樹
	臨時職員	竹野谷俊夫

発掘調査参加者

今成ハル子　大野ハツ　大野カネ子　岡　和夫
小暮辰治　小暮雄一　斎藤好江　渋沢ヤイ
高橋ちよ子　田嶋律子　田中秀子　根岸弘子
根岸陽子　橋本純子　畑山せつ子　平野イキ子
三浦フミ　山田勇平

(2)　整理・報告書刊行（平成18年度）

深谷市教育委員会教育	長	猪野幸男
	教育次長	古川国康
	次　長	中村信雄
同岡部教育事務所所	長	柳田一郎
	課長補佐	鈴木八十子
	主　査	金井登美子
	〃	根岸　宏
	〃	鳥羽政之
	〃	森田富雄
	〃	宮本直樹
	臨時職員	竹野谷俊夫
	〃	黒澤　恵
	〃	佐藤由江
	〃	布施みゆき



第１図　熊野遺跡の範囲

第２図　熊野遺跡149次調査位置図

II　遺跡の地理・歴史的環境

1．地理的環境

深谷市は、埼玉県の北部に位置し、市内をＪＲ高崎線、関越自動車道などが通る。

熊野遺跡は、深谷市岡字熊野他に所在する。ＪＲ高崎線岡部駅の北西に位置し、東西1,300ｍ、南北1,000ｍの範囲に及ぶ。近年は市街化が進んでいる。

遺跡は、櫛挽台地の北部に立地する。南部には標高116ｍの山崎山とこれに連なる諏訪山が存在する。遺跡の中心から600ｍ北は崖線となり、比高差20ｍをもって妻沼低地へ移行する。また、櫛挽台地の西は藤治川により区分され、本庄台地と接している。

2．歴史的環境

熊野遺跡の立地する櫛挽台地北部は、早くから開発が進み、これらに伴う発掘調査の結果、縄文時代～中世に至る様々な遺構・遺物が検出されている。

縄文時代では、西谷遺跡から押圧縄文・爪形文土器などが検出され、草創期の土器として注目されてきた。遺構では、四十坂遺跡で前期の竪穴住居跡が、水窪遺跡や菅原遺跡から中期の住居跡が、上宿遺跡で後期の敷石住居跡が検出されている。

弥生時代では、四十坂遺跡より縄文晩期～弥生初期の土器群が出土し、弥生初期のまとまった資料として早くから注目されてきた。その後、平成２年の発掘調査では、再葬墓や土坑墓群が検出された。

古墳時代に至ると、遺跡数は急増し、重要な遺構も多数確認されている。

四十坂遺跡からは、五領～和泉期に至る方形周溝墓群が検出され、この段階から後期群集墳まで連綿と墳墓が営まれていたことが知られる。中でも四十塚古墳は、横矧板鋲留短甲・五鈴鏡板付轡などを出土し、これらの遺物から５世紀後半の当地域の首長墓と捉えられている。

その後、６世紀代には、やはり首長墓と想定される寅稲荷塚古墳（前方後円墳）が四十塚古墳群内に出現する。これ以降、首長墓は、お手長山古墳（帆立貝式古墳）・内出八幡塚古墳（円墳）・愛宕山古墳（方墳）と順次南東方向へ移動しながら単独で築造されたことが認められる。

この他に、熊野遺跡の東に接する白山古墳群では、６世紀代の古墳跡24基（円墳23、帆立貝式古墳１）が調査された。弾琴埴輪や壺を捧げ持つ巫女の埴輪など６体の人物埴輪が、ほぼ完全な形で出土した。

なお、櫛挽台地北部における古墳時代の集落は、現在のところ中宿遺跡や上宿遺跡など数か所が確認されているに過ぎない。この時代の集落は、妻沼低地に立地する砂田前遺跡・岡部条里遺跡や本庄台地上の六反田遺跡・大寄遺跡・宮西遺跡などがあり、櫛挽台地以外に分布の中心が認められる。

奈良～平安時代になると、様相は一変する。それまで墓域として利用されてきた熊野遺跡内に、突如集落が営まれる。これまでに162次に及ぶ調査が実施され、700軒を超える竪穴住居跡、150棟の掘立柱建物跡をはじめ、道路状遺構・大溝・石組井戸・連房式鍛冶工房など特殊な遺構が多数検出された。また、円面硯・帯金具・唐三彩の陶枕・刻字紡錘車・陶製仏殿・置きカマドなど他の集落では見られない貴重な遺物も多数出土している。

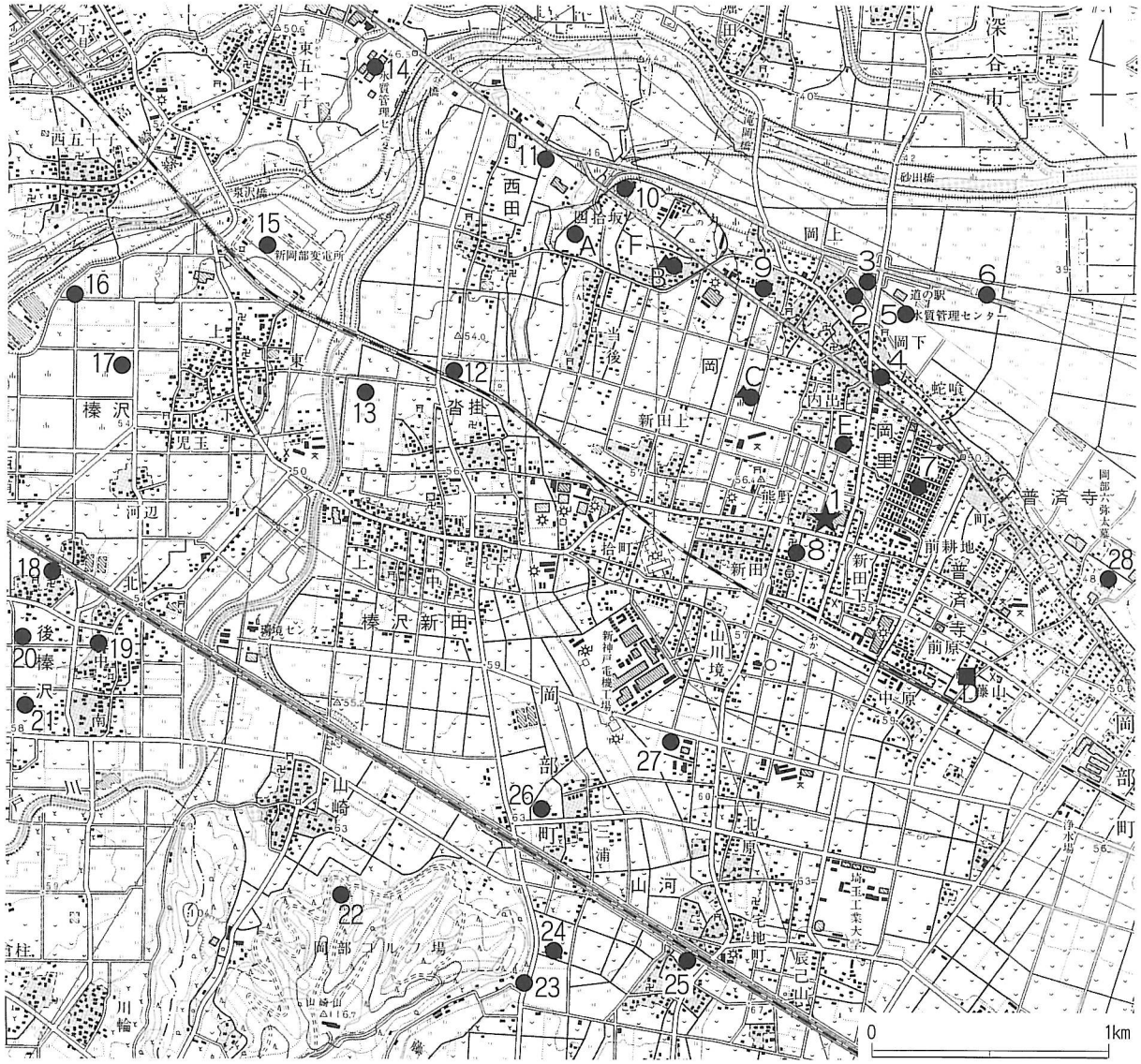
なお、集落の開始時期は、131次調査１・２号竪穴住居跡から出土した畿内産土師器の年代観から、７世紀第３四半期と考えられている。さらに、１次調査において検出された７間×３間をはじめとする大型建物の存在から、該期の熊野遺跡は初期評家と想定されている。

また、櫛挽台地縁辺部に位置する中宿遺跡からは、大規模な総柱式建物跡20棟が規則的に配置された状態で検出された。榛沢郡家に伴う正倉跡と推定され、７世紀後半の成立であることから熊野遺跡との関連が想定される。これと前後して台地直下には「滝下大溝」が掘削された。その北側には条里遺構が検出されたことから、灌漑と運河の機能を併せ持っていたことが考えられる。

さらに、熊野遺跡の北東に位置する岡遺跡では、８世紀第２四半期と考えられる蓮華文軒丸瓦などが多量に出土する範囲があり、廃寺跡と推測されてきた。平成13年度に町教委が実施した確認調査により、版築された基壇状遺構が検出された。近接する住居跡から「榛」の刻字瓦や「寺」と墨書された土師器坏も出土し、寺院跡であることが立証された。

このように、奈良～平安時代の櫛挽台地北部は、中宿遺跡・熊野遺跡を中心として、その周辺に集落や寺院が展開していた状況が窺われる。

古代から中世にかけては、まず岡部六弥太館跡があげられる。方形に廻る堀跡や井戸、土壙墓などが検出された。同様な堀跡は、熊野遺跡と白山遺跡からも検出され、館跡に付属するものと推定されている。西龍ヶ谷遺跡では、軸を揃えて並んだ６棟の掘立柱建物群が確認された。



1．熊野遺跡　(律令期集落・官衙・中世居館)
2．中宿遺跡　(郡衙正倉・律令期集落)
3．滝下遺跡　(河川跡・律令期集落)
4．岡廃寺　(寺院跡・古墳～律令期集落)
5．岡部条里遺跡　(古墳集落・条里水田・律令期居宅)
6．砂田前・樋詰遺跡　(古墳～平安集落)
7．白山遺跡　(古墳群・律令期集落・中世居館)
8．新田遺跡　(律令期集落)
9．上宿遺跡　(縄文・古墳～律令期集落)
10．四十坂遺跡　(縄文集落・弥生再葬墓・周溝墓・古墳群)
11．原ケ谷戸遺跡　(縄文・古墳集落・古墳群)
12．水窪遺跡　(縄文・古墳集落・周溝墓・古墳群)
13．新井遺跡　(律令期集落)
14．東五十子遺跡　(古墳・中世集落)
15．六反田遺跡　(古墳・中世集落)
16．大寄遺跡　(縄文・弥生～律令期集落)
17．西浦北遺跡　(縄文・古墳～律令期集落)
18．東光寺裏遺跡　(縄文・平安集落)
19．榛沢六郎成清館跡　(中世)
20．石蒔遺跡　(古墳～平安集落・周溝墓)
21．地神祇遺跡　(古墳～平安集落)
22．千光寺遺跡　(古墳群・平安集落)
23．西谷遺跡　(縄文)
24．茶臼山遺跡　(古墳群)
25．伝上杉館跡　(中世)
26．山河聖天社　(中世)
27．西龍ヶ谷遺跡　(律令期集落・中世居館)
28．伝岡部六弥太館跡　(中世)
A．四十坂浅間山古墳　(円墳)
B．寅稲荷塚古墳　(前方後円墳)
C．お手長山古墳　(帆立貝式古墳)
D．前原愛宕山古墳　(方墳)
E．内出八幡塚古墳　(円墳)
F．四十塚古墳群　(古墳群)

第３図　周辺の遺跡分布

Ⅲ　発見された遺構と遺物

１．熊野遺跡の概要

熊野遺跡は、櫛挽台地北端部に展開する集落跡である。遺跡の標高は55ｍ前後であり、南西から北東に向かって緩やかな傾斜を有している。遺跡から北東へ約600ｍで台地縁辺部に達し、眼下には利根川及び小山川により開析された妻沼低地が開けている。沖積地との比高差は、約20ｍ程である。遺跡は、南北約1,000ｍ、東西約1,300ｍを測り、当地域最大の規模を誇る。

熊野遺跡は、主として奈良・平安時代～中世にかけて営まれた複合遺跡である。それ以前の櫛挽台地北部は、古墳群が造営される墓域であった。熊野遺跡内にも、終末期の帆立貝式古墳であるお手長山古墳と、これに続くと考えられる内出八幡塚古墳（円墳）が築造された。その後７世紀中葉から後半にかけて、遺跡が形成されたことが、これまでの発掘調査により明らかとなっている。

発掘調査は、まず岡部西小学校建設に先立ち、昭和52年～54年に実施されたのが始まりである。３次にわたる調査の結果、奈良～平安時代を中心とした竪穴住居跡83軒、掘立柱建物跡２棟が検出された。遺物では、円面硯や帯金具などの出土が注目される。

また、平成４年度から始まった岡中央土地区画整理事業に伴う発掘調査は、現在までに162次にわたり実施されている。調査の結果、竪穴住居跡700軒、掘立柱建物跡150棟あまりが検出された。このほか、７間×３間の大型建物や、大規模な石組井戸跡、連房式鍛冶工房、大溝等が特筆される。出土遺物では、多量の土器類のほかに、帯金具・円面硯・唐三彩・和同開珎・刻字紡錘車なども特筆される。さらに、鎌・鋤先などの農耕具や刀子などの鉄製品も多いが、鉄鏃や小札などの武器・武具の出土も注目される。

更に、これらと並行して実施された㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団の４次の調査により、竪穴住居跡201軒、掘立柱建物跡110軒、道路状遺構、井戸跡４基などが検出されている。遺物では、陶棺や置きカマドなども出土している。

遺跡が形成されたのは、131次調査１号・２号住居跡から出土した畿内産土師器の年代観から、７世紀第３四半期と推定される。その後、10世紀代まで集落が営まれていたことが判明している。

２．発見された遺構と遺物

今回報告する発掘調査地点は、深谷市岡字内出2844番地（岡中央土地区画整理事業38街区11画地）である。平成４年度以降に実施された熊野遺跡における発掘調査では、149次調査にあたる。

調査により検出された遺構は、奈良時代の竪穴住居跡１軒、中世～近世の溝跡３条、土坑５基、ピット85基である。近接するアパート２棟の調査であったため、便宜上北の調査区をＡ区、南をＢ区として調査を実施した。

以下、順を追って詳述する。

１号竪穴住居跡

Ｂ区の南部に位置する。

住居の南側が調査区域外にあるため、規模は不明である。短軸は3.02ｍを測り、長軸3.28ｍ以上である。平面形態は長方形を呈すると想定される。主軸方位は、Ｎ－80°－Ｗを示す。

壁はやや角度をもって掘り込まれ、床面は平坦である。確認面からの深さは、22cm前後を測る。

ピットは４基が検出された。平面形態はいずれも円形で、直径38～55cm、床面からの深さは22～67cmを測る。

また、床下土坑も検出された。大半が調査区域外にあるため、規模は不明である。直径102cm以上、深さ17cm以上となる。

壁溝はカマドを除き全周した。幅は20～35cm、床面からの深さは６～14cmを測る。

カマドは、西壁を削り出し構築されていた。袖は粘土の造り付けで、右袖54cm、左袖48cmを測る。燃焼部は、長さ98cm、最大幅48cmを測る。底面は平坦で、煙道に向かい緩やかに立ち上がる。

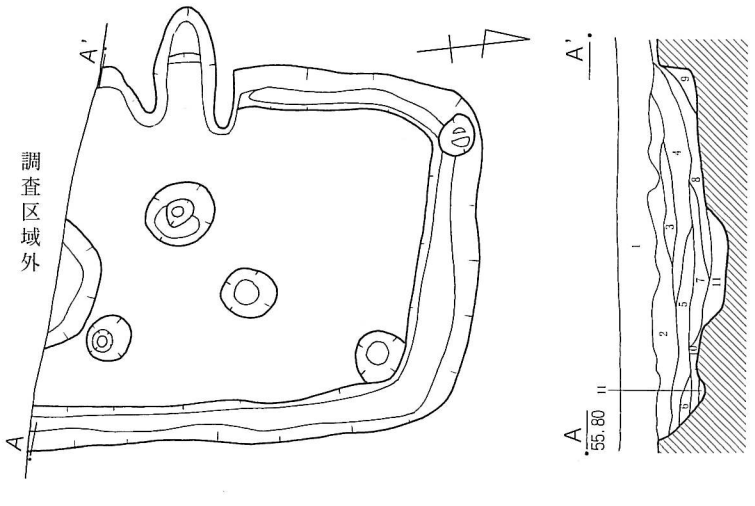
出土遺物は、カマド内及びその周辺に集中していた。土師器の坏・甕・甑、須恵器の蓋・坏・長頸瓶、土製支脚、砥石、磨り石などが出土した。時期は７世紀末～８世紀初頭と考えられる。

１号溝

Ａ区の東端を南北に縦断する。

両端が調査区域外にあり規模は不明であるが、長さ7.54ｍにわたり検出された。ほぼ直線的に走行し、方位はＮ－19°－Ｅを示す。

第４図　熊野遺跡149次調査全測図

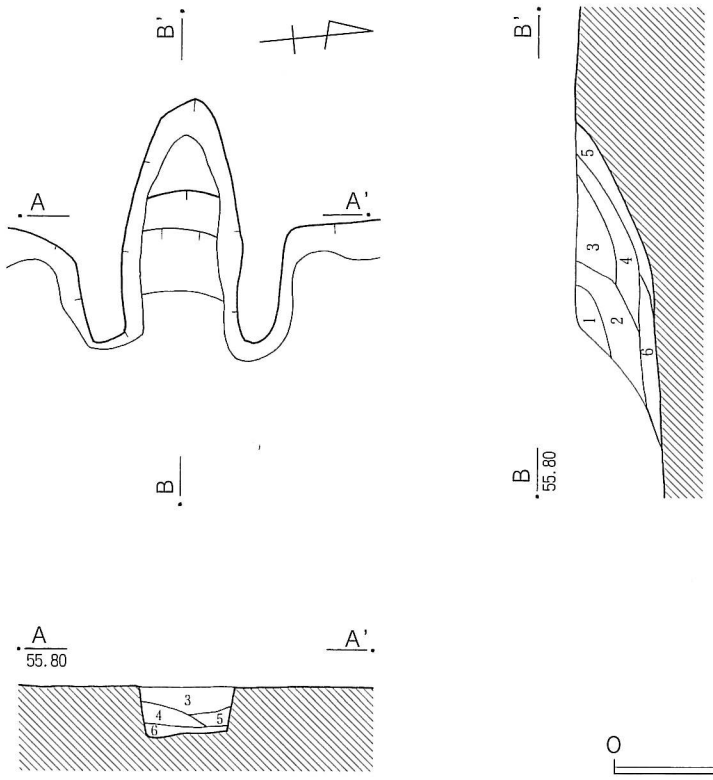


【1号住居跡土層説明】

1	暗褐色土	A軽石を多量含む。しまり・粘性弱い。
2	茶褐色土	ローム粒を微量含む。しまり・粘性なし。
3	暗茶褐色土	ローム粒を微量含む。
4	黒褐色土	ローム粒を少量、炭化粒・焼土粒微量含む。
5	暗茶褐色土	ローム粒を多量含む。
6	茶褐色土	ローム粒を多量含む。
7	茶褐色土	ローム粒多量、ロームブロックを少量含む。
8	暗茶褐色土	ローム粒多量、ロームブロック微量含む。
9	茶褐色土	ローム粒多量、ロームブロックを微量含む。
10	茶褐色土	ローム粒を多量含む。
11	茶褐色土	ローム粒を多量含む。

0　2m

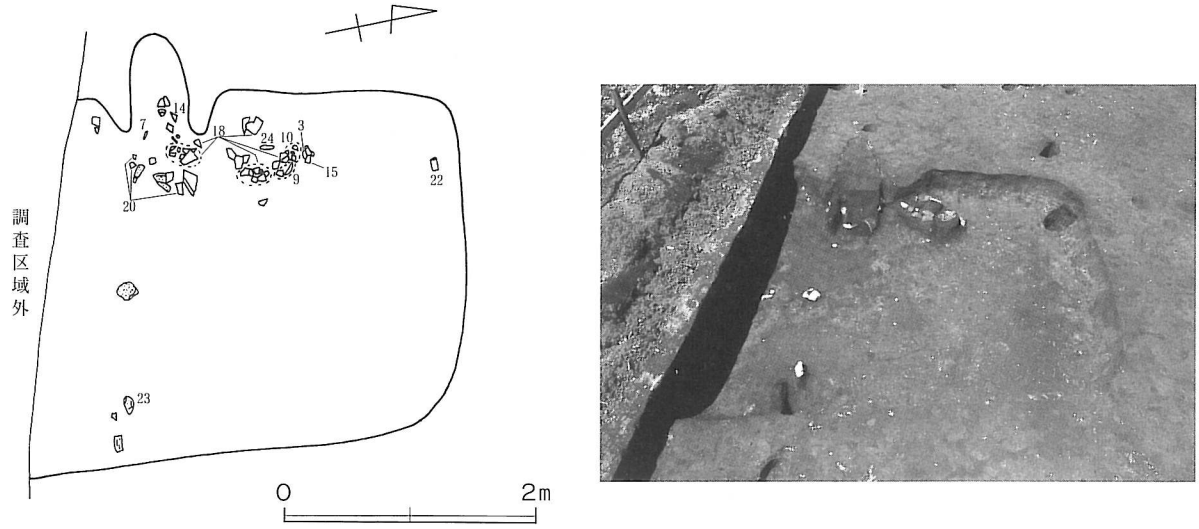
第5図　1号住居跡実測図



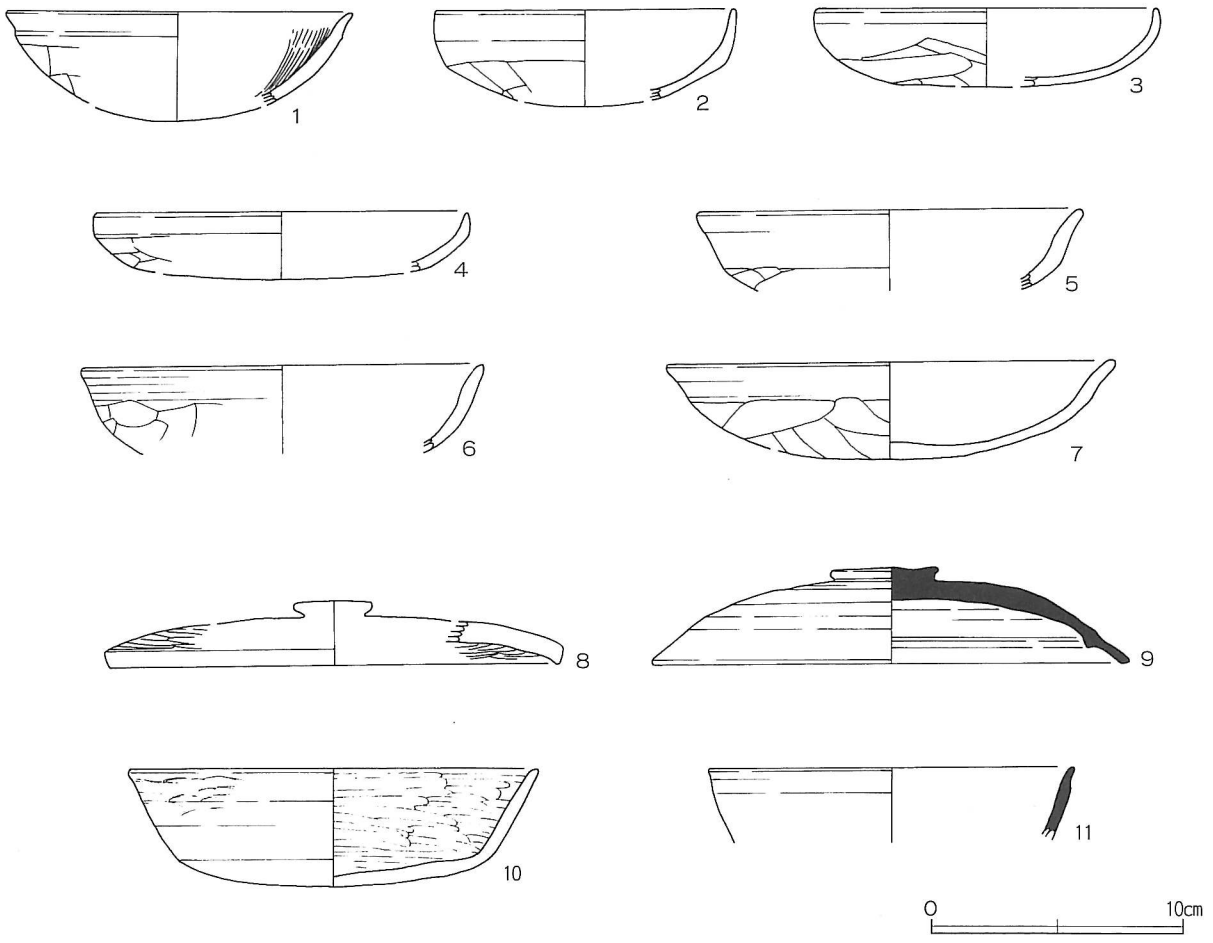
【1号住居跡カマド土層説明】

1	暗茶褐色土	ローム粒少量、焼土粒を微量含む。しまり・粘性なし。
2	黒褐色土	焼土粒を少量含む。しまりやや弱い。
3	暗茶褐色土	焼土粒を多量含む。
4	暗茶褐色土	焼土粒を少量含む。
5	茶褐色土	ローム粒を多量含む。粘性あり。
6	黒褐色土	灰層。焼土粒を少量含む。

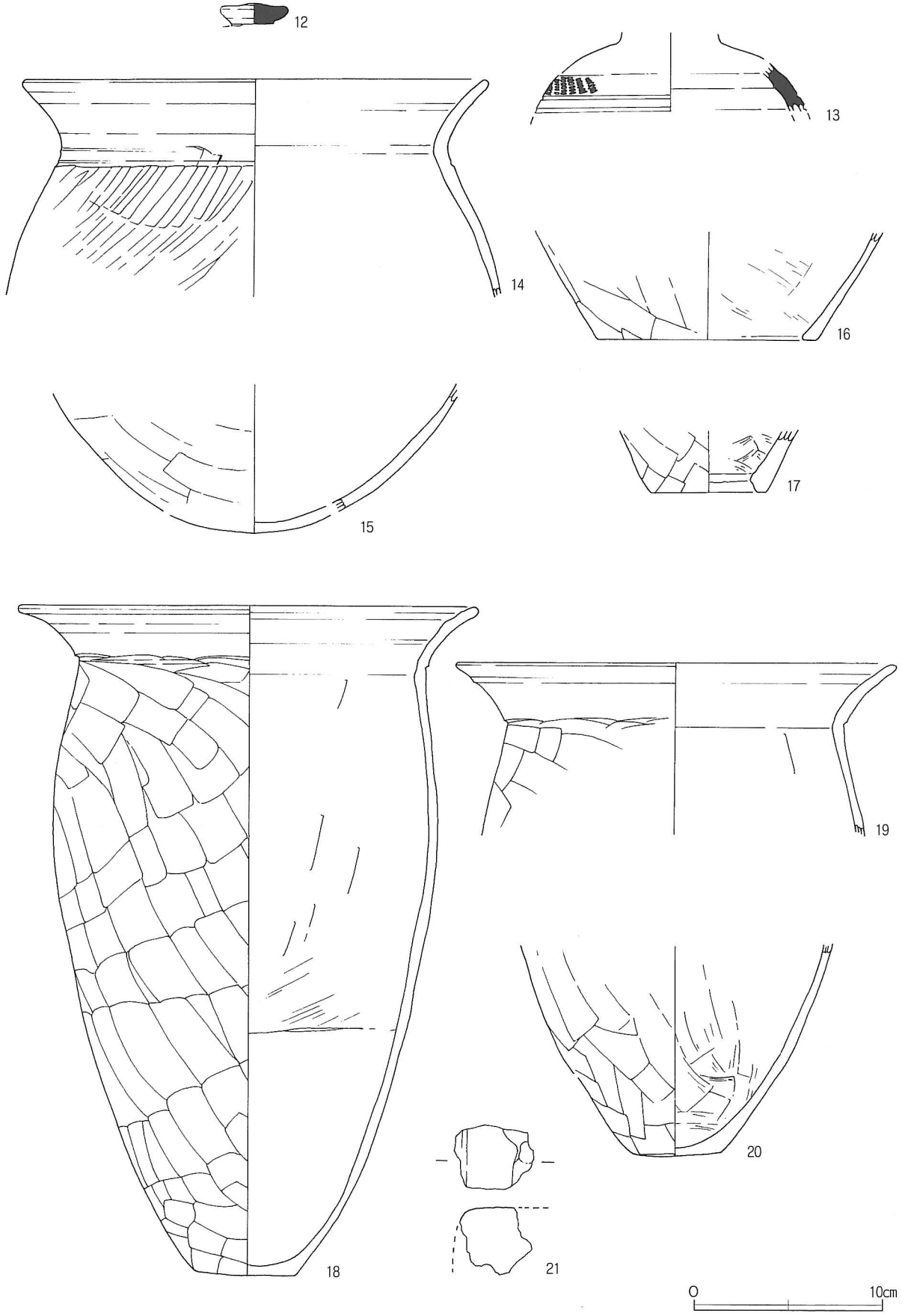
第6図　1号住居跡カマド実測図



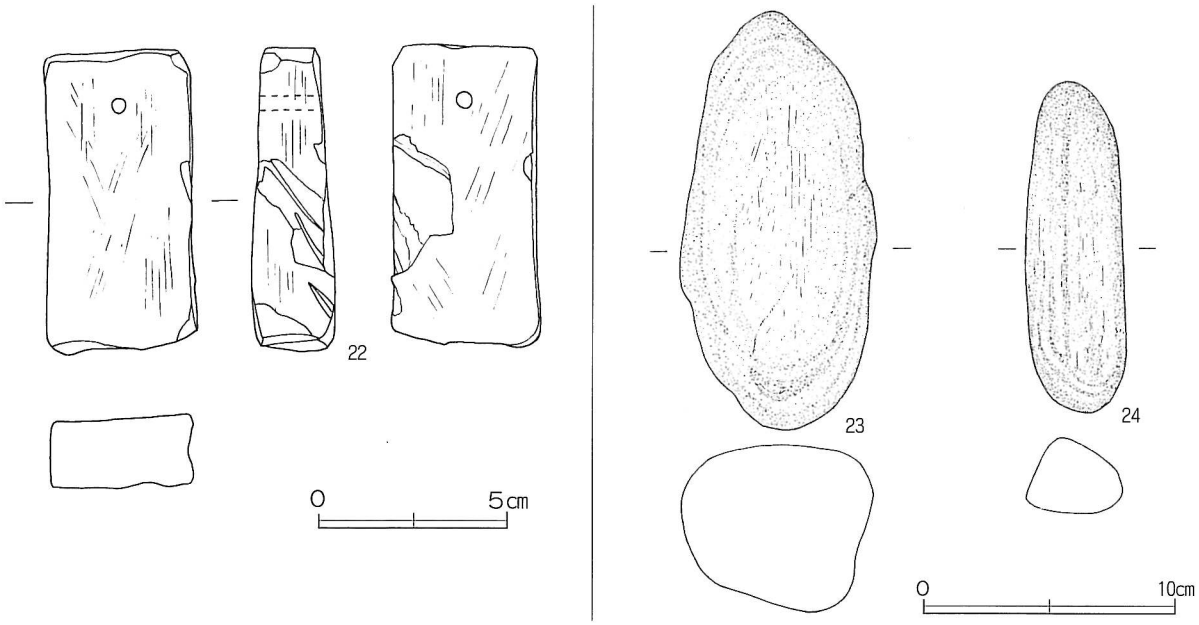
第７図　１号住居跡遺物出土状況図



第８図　１号住居跡出土遺物実測図(1)



第９図　１号住居跡出土遺物実測図(2)



第10図　1号住居跡出土遺物実測図(3)

1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	坏	(13.5)	(4.3)	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、砂粒、赤色粒	図示 10%	カマド一括、内面放射状暗文
2	〃	(11.7)	(3.8)	-	暗赤褐色	〃	石英、角閃石	図示 40%	覆土一括、内面に油脂状黒斑
3	〃	(13.4)	(3.1)	-	橙色	〃	石英、角閃石、砂粒	図示 25%	図示
4	〃	(14.6)	(2.7)	-	橙褐色	〃	石英、雲母、微砂粒	図示 7%	カマド一括
5	〃	(15.1)	《3.2》	-	暗橙褐色	〃	石英、角閃石	図示 12%	覆土一括
6	〃	(15.7)	《3.5》	-	〃	〃	石英、角閃石、微砂粒	図示 20%	カマド一括
7	皿	(17.5)	3.8	-	〃	〃	石英、角閃石、砂粒	図示 35%	図示、内面油脂状黒斑
8	蓋	(17.6)	《1.7》	-	赤褐色	良好	角閃石、雲母、(精良)	図示 7%	カマド一括、表裏ヘラミガキ、ロクロ使用
9	〃	18.7	3.8	-	灰橙褐色	やや悪	石英、砂粒	図示 65%	図示、末野、未還元
10	坏	16.0	4.6	12.2	赤褐～漆黒	〃	微砂粒、赤色粒、雲母	80%	図示、一部黒色処理、ヘラミガキ、ロクロ使用
11	椀	(14.3)	《2.9》	-	灰色	良好	長石、片岩	図示 5%	覆土一括、末野
12	蓋	鈕径 3.6	鈕高 1.1	-	灰褐色	普通	石英、長石、片岩	図示 99%	覆土一括、末野
13	長頸瓶	-	《2.5》	-	〃	〃	石英、長石、片岩	図示 25%	覆土一括、末野、櫛歯押引文
14	甕	(24.3)	《11.5》	-	赤褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示 15%	カマド図示
15	〃	-	《6.8》	-	暗赤褐色	〃	石英、角閃石、雲母	図示 35%	図示
16	甑	-	《5.8》	(11.5)	黄褐色	〃	石英、雲母、(精良)	図示 15%	覆土一括
17	〃	-	《3.3》	(6.0)	灰赤褐色	〃	石英、長石、角閃石、雲母	図示 20%	カマド一括
18	甕	24.0	35.3	4.9	暗橙褐色	〃	石英、角閃石、雲母、砂粒	図示 70%	図示
19	〃	23.0	《9.1》	-	〃	〃	石英、角閃石、砂粒	図示 10%	覆土一括
20	〃	-	《11.2》	4.6	暗橙～黒褐	〃	石英、角閃石、雲母	図示 55%	カマド図示
21	土製支脚	長さ（cm） 《3.4》	幅（cm） 《4.2》	厚さ（cm） 《3.6》	重さ（g） 31.3	〃	砂粒、スサ、細礫	破片	カマド一括
22	砥石	8.0	3.9	2.3	107.3	-	-	95%	図示、有孔、凝灰岩製
23	磨り石	16.4	7.7	6.5	1195.0	-	-	-	図示、砥ぎ跡有り
24	〃	12.9	4.0	3.0	215.0	-	-	-	図示

幅は24～50cmを測る。底面は丸みを帯び、断面は皿状を呈する。確認面からの深さは、7.7cm前後と浅い。

遺物は、出土しなかった。

２号溝

Ｂ区の東端を３号溝と平行する形で南北に縦断する。断面観察により、２号溝の方が新しいことが確認できた。

両端が調査区域外にあり規模は不明であるが、長さ7.4ｍにわたり検出された。確認面での幅は98～120cmを測る。主軸方位はＮ-27°-Ｅを示すが、北へ行くに従い若干東に振れる。

底部は、南半部においては幅20cm前後で、断面形態は逆台形を呈する。調査区中央から北に向かい底面の幅は広がり、調査区北端では幅92cmとなり、断面は皿状となる。確認面からの深さは18cmである。

遺物は、出土しなかった。

３号溝

Ｂ区の東端を２号溝と平行して南北に縦断する。両端が調査区域外にあり、全容は不明である。

検出されたのは5.7ｍの範囲で、しかも西側の落ち込み部だけである。確認面での幅は92～110cmを測る。

主軸方位はＮ-27°-Ｅを示すが、北へ行くに従い若干東に振れる。

遺物は、出土しなかった。

１号土坑

Ａ区の北端に位置する。

平面形態は不整楕円形を呈し、長軸90cmを測る。壁はやや角度を持って掘り込まれ、深さは22cmである。底面は中央が若干くぼみ、南寄りに径25cmのピットが掘り込まれている。

遺物は出土しなかった。

２号土坑

Ａ区の北東寄りに位置する。

平面形態は不整楕円形を呈し、長軸は119cmを測る。

壁は緩やかに掘り込まれ、断面は皿状を呈する。確認面からの深さは、12cmと浅い。

遺物は出土しなかった。

３号土坑

Ａ区の南寄りに位置する。

平面形態は不整楕円形を呈し、長軸は104cmを測る。

壁は緩やかに掘り込まれ、断面は皿状を呈する。確認面からの深さは、15cmである。

遺物は出土しなかった。

４号土坑

Ａ区の中央に位置する。

平面形態は不整円形を呈し、直径84cmを測る。

壁は角度を持って掘り込まれ、確認面からの深さは39cmである。

遺物は出土しなかった。

５号土坑

Ａ区の南寄りに位置する。

平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸は151cm、短軸は29cmを測る。

壁は角度を持って掘り込まれ、底面は平坦である。確認面からの深さは、13cmである。

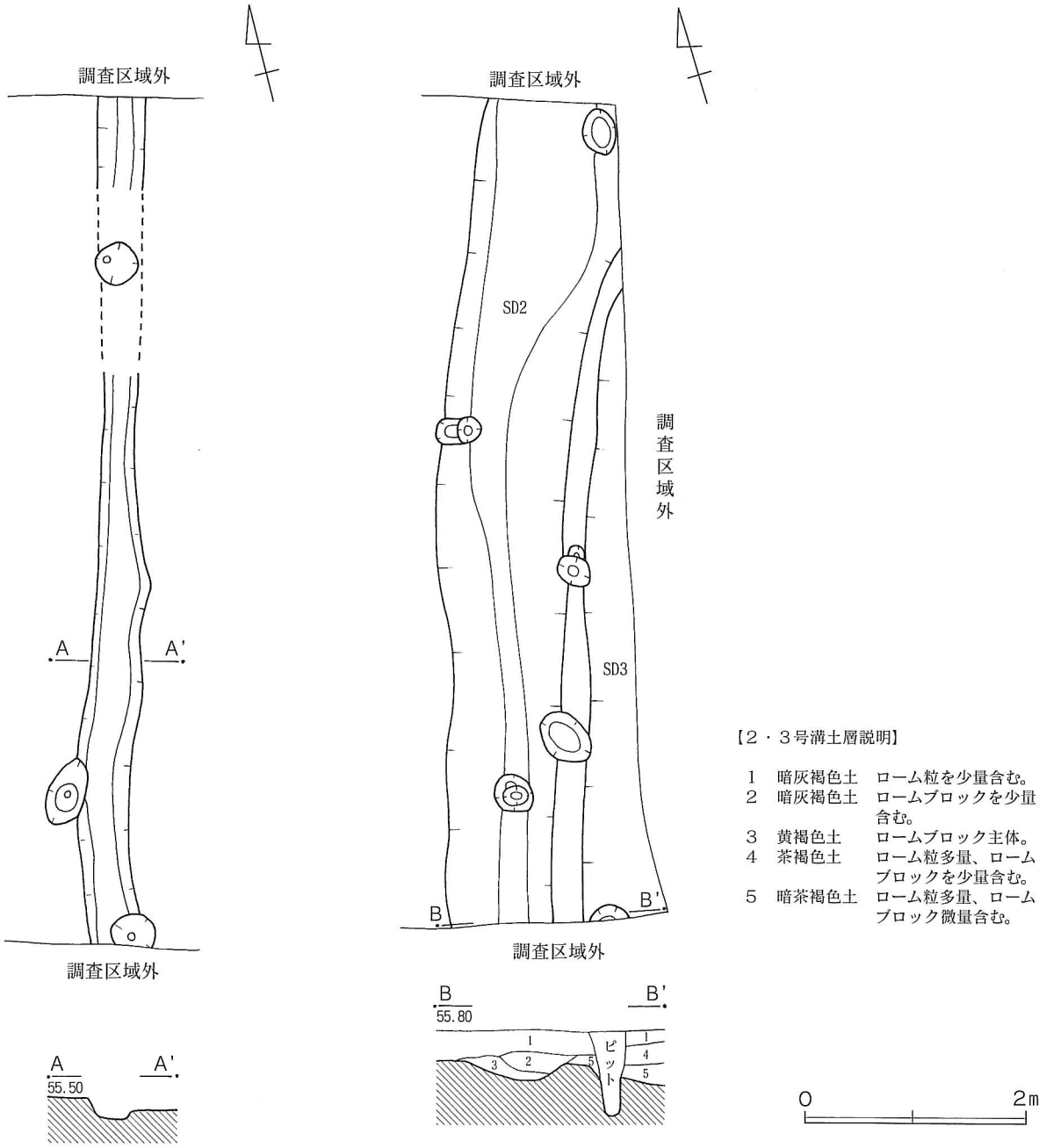
遺物は出土しなかった。

ピット群

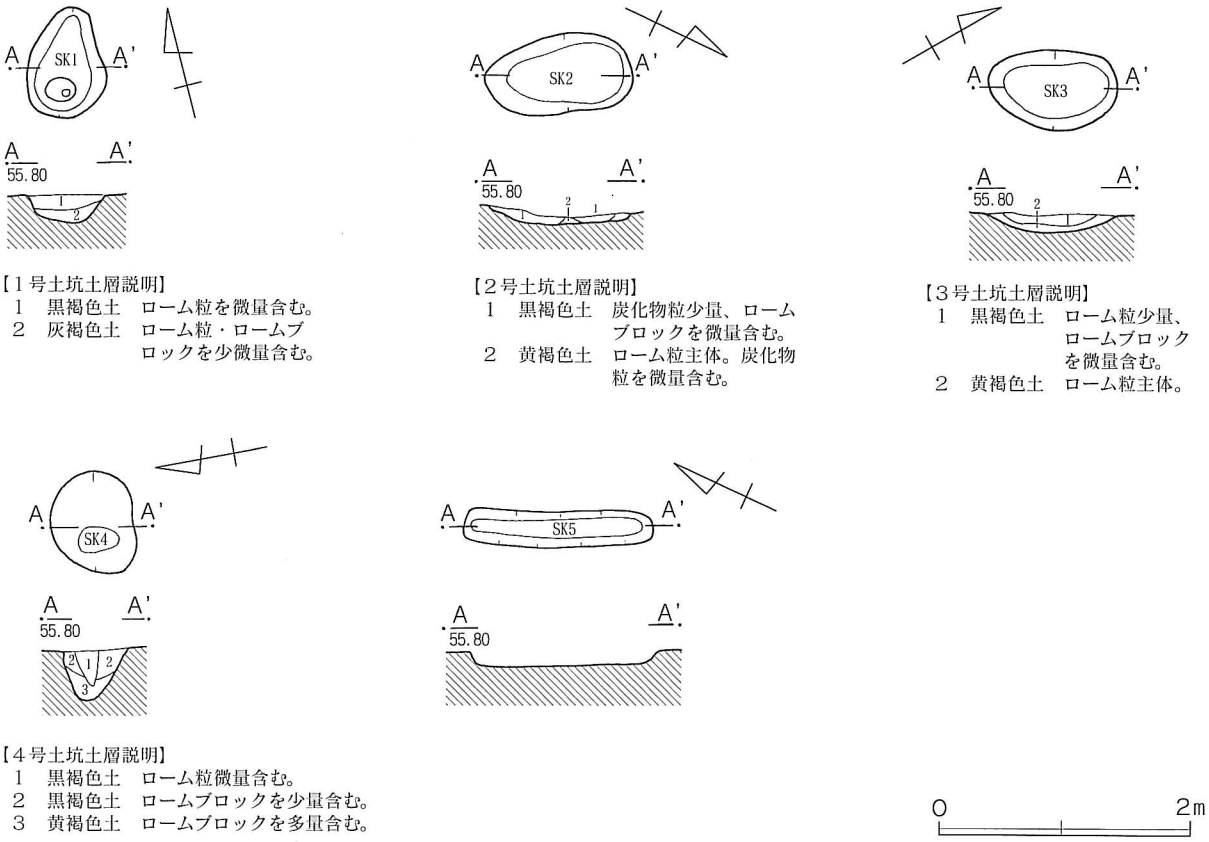
先述したとおり、ピットはＡ・Ｂ両区を合わせて85基が検出された。しかしながら、建物等の配列が判明したものはなかった。

いずれも平面形態は円形を基本としている。規模は、直径21～118cm、深さ７～57cmと、ばらつきが見られる。

遺物は土師器・須恵器などが出土しているが、いずれも小破片であり、図示できうるものではなかった。さらに、埋土の様相からピットは古代に遡るものではなく、いずれも混入と考えられる。



第11図　１号溝(左)、２・３号溝(右)実測図



【1号土坑土層説明】
1　黒褐色土　ローム粒を微量含む。
2　灰褐色土　ローム粒・ロームブロックを少微量含む。

【2号土坑土層説明】
1　黒褐色土　炭化物粒少量、ロームブロックを微量含む。
2　黄褐色土　ローム粒主体。炭化物粒を微量含む。

【3号土坑土層説明】
1　黒褐色土　ローム粒少量、ロームブロックを微量含む。
2　黄褐色土　ローム粒主体。

【4号土坑土層説明】
1　黒褐色土　ローム粒微量含む。
2　黒褐色土　ロームブロックを少量含む。
3　黄褐色土　ロームブロックを多量含む。

第12図　1～5号土坑実測図

Ⅳ　まとめ

今回検出された遺構は、竪穴住居跡1軒と溝3条、土坑5基及びピット群である。

1号住居跡はB区から検出され、出土した土器などから7世紀末～8世紀初頭と想定されるものである。他の遺構については、遺物の出土がなく時期は不明であるが、覆土の状態などから古代に遡るものではないと推測される。

A区からは古代の遺構は検出されなかったが、北に接する143次調査地点では住居跡や掘立柱建物跡が重複して検出されている。さらにその東方には住居跡と掘立柱建物跡が密集する一群があり、多量の土器群とともに鉄鏃・鋤先・鎌・刀子などの鉄製品が出土している。これらのなかには帯金具を出土した内出遺跡13号住居跡（7世紀後半）、和同開珎を出土した同14号住居跡（8世紀前半）も含まれる。さらに遺跡北端の19号住居跡からは、柄香炉形土製品も検出され、注目される。

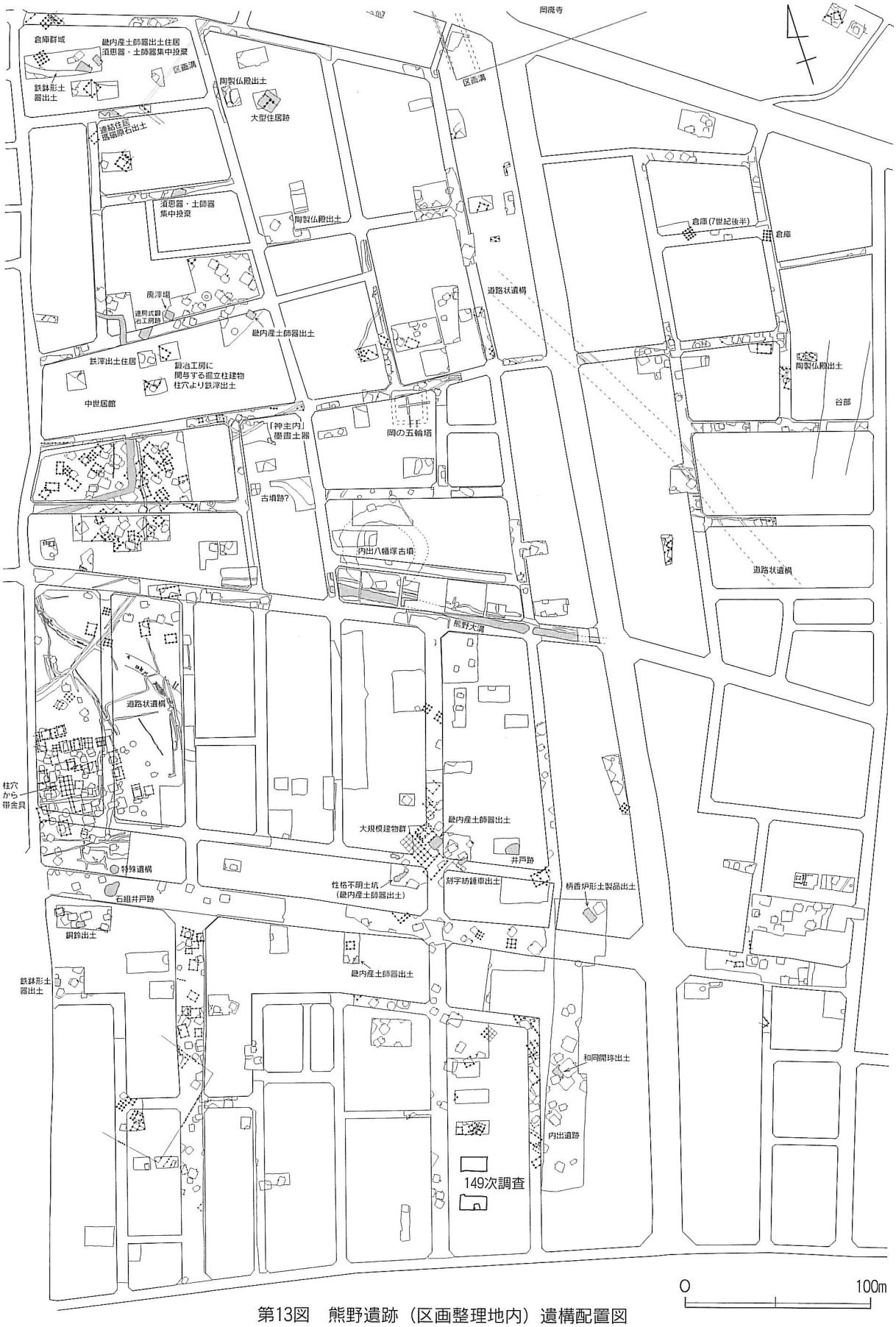
また、本調査地点から北方150mにおける1次調査は、7間×3間をはじめとした大型建物群の検出や4号住居跡から畿内産土師器が出土したことなどから、榛沢初期評家の性格が与えられている。これらの建物群と内出遺跡周辺の遺構群の主軸方位が近似していることや、先述した豊富な遺物群から、両者は密接な関わりがあったと推測される。

今回報告した1号住居跡は、時期的に先の内出遺跡13号住居跡～14号住居跡にかけて存続すると考えられる。ただし、主軸方位だけを見ると、むしろ西方に展開する62次調査区や61次調査区の住居群と揃える傾向が見受けられる。

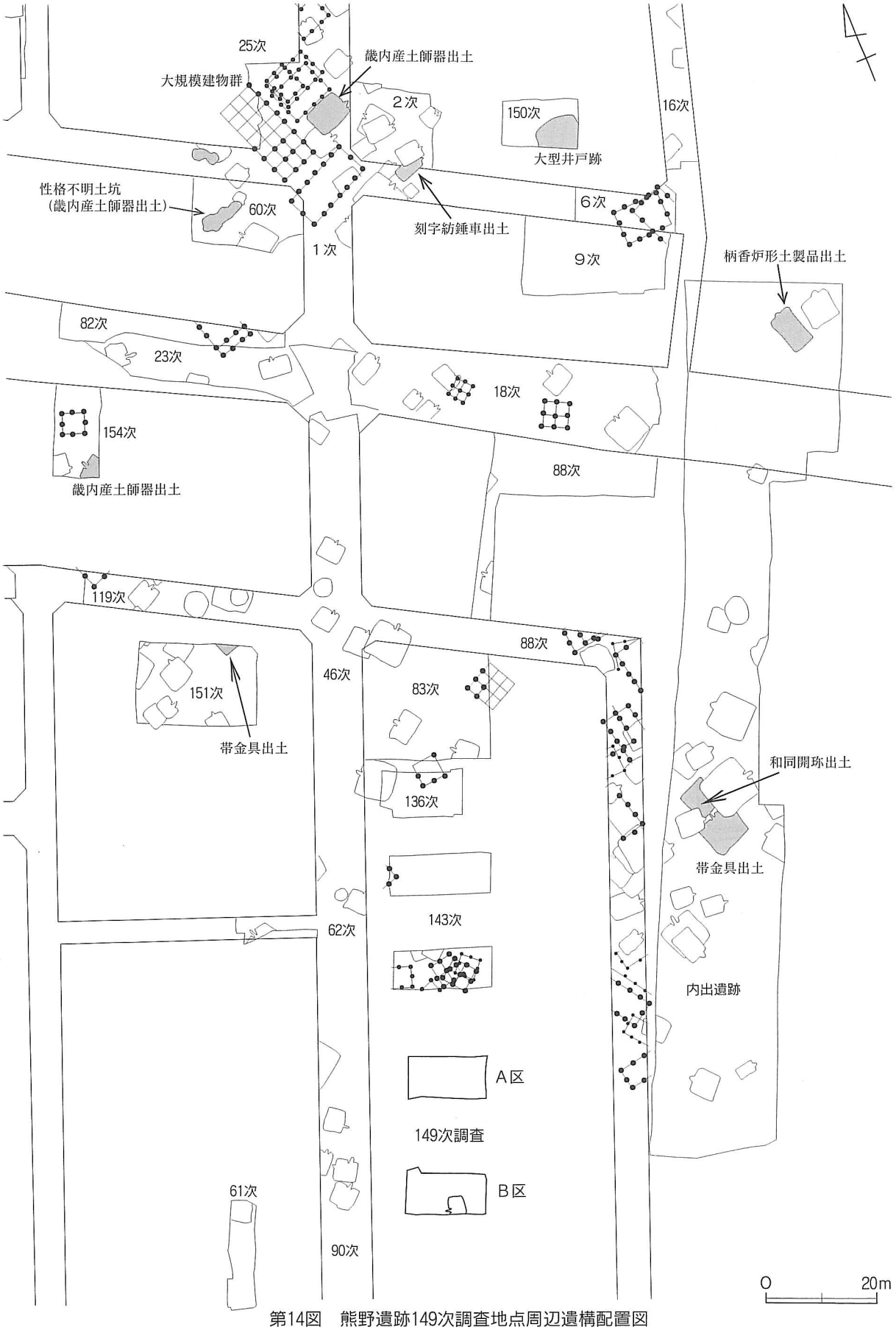
周辺の遺構及び出土遺物は現時点では未整理であり、詳細な検討が今後の課題である。

[参考文献]

鳥羽政之・竹野谷俊夫　2001「熊野遺跡Ⅰ」岡部町遺跡調査会　他



第13図　熊野遺跡（区画整理地内）遺構配置図



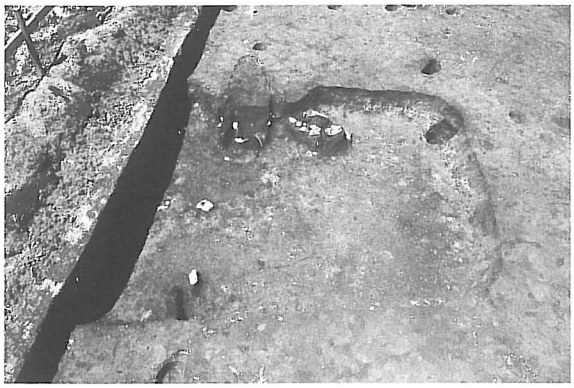
第14図　熊野遺跡149次調査地点周辺遺構配置図

写真図版

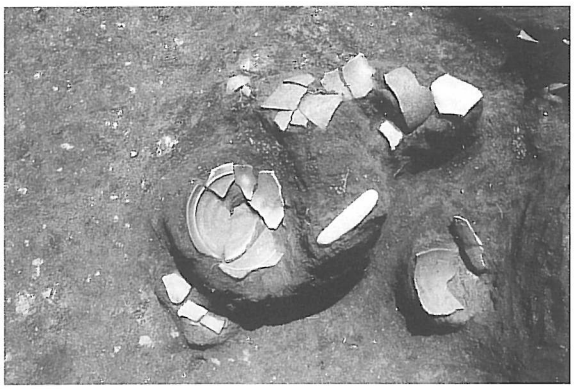
図版1

A区全景

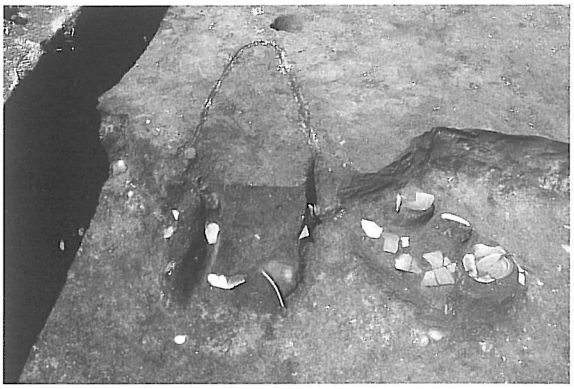
B区全景



1号住居跡遺物出土状況(1)



1号住居跡遺物出土状況(2)



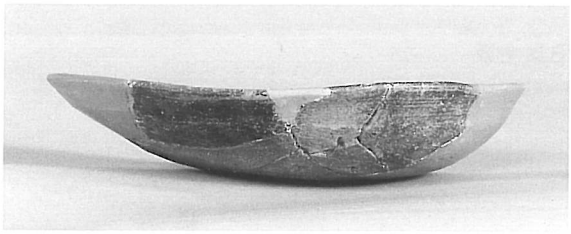
1号住居跡遺物出土状況(3)

1号住居跡カマド遺物出土状況

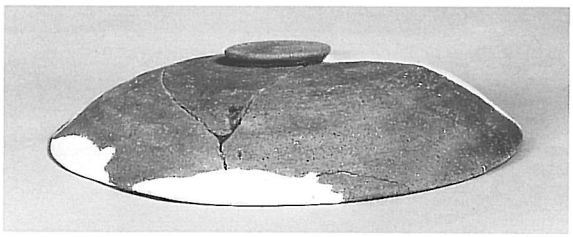
図版2

1号住居跡No.2

1号住居跡No.3

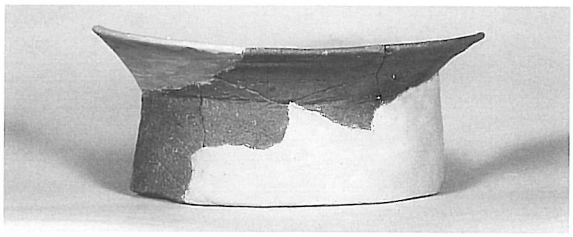


1号住居跡No.7

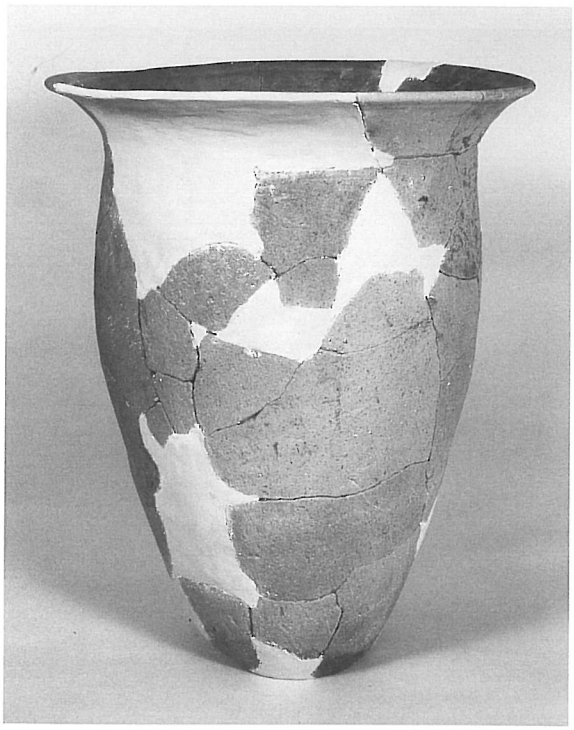


1号住居跡No.9

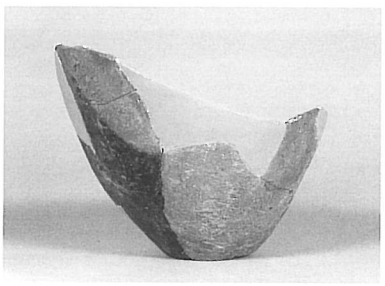
1号住居跡No.10



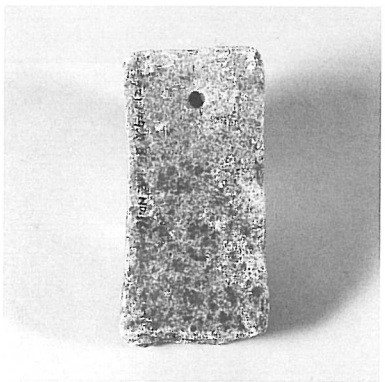
1号住居跡No.19



1号住居跡No.18



1号住居跡No.20



1号住居跡No.22

報告書抄録

ふりがな	くまのいせき
書　名	熊野遺跡Ⅴ
副書名	
シリーズ	深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	第79集
編著者名	宮本直樹・竹野谷俊夫
編集機関	深谷市教育委員会
所在地	〒366-0823　深谷市本住町17番地３　TEL048(572)9581
発行日	平成18年10月１日

所収遺跡（しょしゅういせき）	所在地（しょざいち）	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
熊野遺跡（くまのいせき） (149次調査)	埼玉県深谷市岡（さいたまけんふかやしおか） 字内出（あざうちで）2844	11218	63-17	36° 12′ 24″	139° 14′ 27″	平成11年４月26日から 平成11年５月31日まで	225㎡	アパート建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡 官衙跡 居館跡	奈良～平安時代 中世	竪穴住居跡 溝　跡 土　坑 ピット	土師器 須恵器 土製品 石製品	

熊野遺跡Ⅴ

2006年10月１日

編集発行　●深谷市教育委員会
埼玉県深谷市本住町17番地３